

# 通信途絶

## 家族や知人等の安否の確認も困難に。

発災直後、通信規制が実施され、津波による通信建物の損壊や電柱の倒壊、伝送路の損傷等に加え、大規模な停電が発生したことにより、通信事業者のサービスが停止しました。

平日の昼の時間帯の発災で、学校や職場など自宅以外の場所で被災した人も多く、また、津波による被災により、家族とはぐれ、救助後の移送先が別々の場所になる中、長期間にわたる通信の途絶や輻そうなども影響し、県民が家族や知人等の安否を確認できない状況が続きました。行政機関においても被害情報等の把握に時間を要しました。



避難所では、手書き等により作成された避難者名簿や安否の確認を求めの人が書いたメモなどが数多く掲示され、避難者が避難所を巡り歩き、張り出された膨大な掲示物の中から家族の安否情報を収集する姿が見られました。

# 食料等の物資不足

## 一日1食でさえも確保が困難となった。

多数の避難者の発生に加え、備蓄倉庫の被災などが重なり、市町村では食料等の物資が不足する事態となりました。県内では、店舗の休業が相次ぎ、営業している場合でも購入制限が設けられました。なかでも、アレルギー対応用の食料、乳幼児用のミルクやオムツなど、乳幼児、高齢者、女性など避難者の多様性に応じた物資の調達ที่ 難しい状況が発生しました。

輸送基地となる県内の空港の被災、道路の寸断などにより県内外等からの物資供給ルートが限定され、物資等の到着までに時間を要する中、食料等を避難者同士で持ち寄り、分け合い、避難所間で連携・融通し合いながら対応したところもありました。

その後、国内外から多くの善意の支援物資が届けられましたが、なかには、小口・混載・不用品と思われる物資もあり、効率的な在庫管理、配送、配布に支障を来しました。

